研究発表

王朝散文の凝集性

——時制とアスペクトを中心に——

Cohesion in Heian vernacular prose: the role of mood, tense, and aspect

Charles J. Quinn, Jr.*

If aesthetics is ever to be more than a speculative play, of the genus philosophical, it will have to get down to the very arduous business of studying the concrete process of artistic production and appreciation. ——Edward Sapir

In analyzing the discourse of *Genji monogatari*, scholarship has long employed categories such as 'plain narration' (*ji no bun*), 'conversation' (*kaiwa*), 'interior monologue' (*naiwa*), 'narrator's personal comments' (*sōshiji*) and 'verse' (*uta, waka*). Perhaps no one would take issue with these terms as subtypes of narrative discourse, but it is a fact that in the text itself they are not always so readily distinguished. For example, respect language (*keigo*) in the "plain" narrative mode is often motivated by a certain *character*'s social position vis-a-vis another character. And are not interior monologue and the narrator's personal comments varieties of the *ji no bun*? Verse, whether entire poems composed by characters, or fragments inserted for

* ミシガン大学博士課程

allusive purposes, is put to a variety of uses. So it would seem worthwhile to attempt a more basic description of the discourse of narrative prose in this period, one that would describe the major rhetorical strategies and distinctions available in the syntax and morphology of the language itself, which are then deployed in different configurations, to different ends, depending on the genre, the author's intentions, and so on.

Previous studies of narrative modes in Heian *monogatari* have tended to focus almost exclusively on the *Genji*, and have often attempted to explain differences in mode or point of view by hypothesizing corresponding differences in the actual world of *monogatari* production and consumption. The present investigation is an attempt to account for the same problems, but it begins by addressing several much more basic issues.

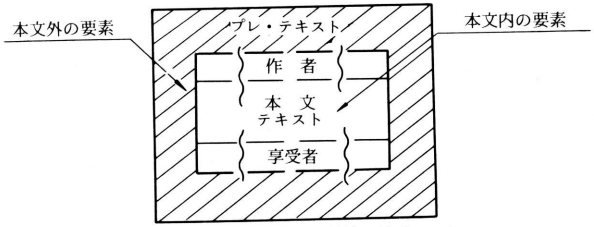
What is it that makes a collection of sentences a coherent text? What are the characteristic *discourse* functions of particular syntactic (e.g. *kakari-musubi*) and morphological (e.g. the various *jodōshi*) strategies? While touching upon a number of the factors involved in establishing cohesion in a text, I will concentrate on the roles played by mood, tense, and aspect, in particular epistemic modality, which is concerned with expression of the speaker's convictions, doubts, and attitudes. The basic distinction drawn in this study is between a mode of narrative *commentary* (the 'marked' mode), which is more or less embedded in the language of the text, and a mode of *events*, which together comprise the plot of the story ('unmarked'). Examples from modern Japanese, English, and French are also

presented as evidence of the very basic nature of this distinction.

I believe that such an approach can, at the very least, serve as a more general supplement to the traditional types mentioned above, and that it may lead to a better understanding of (1) the ways in which a story was told, processed, and understood in Heian Japanese, and (2) the language itself.

今日、幾つかの観点から、かなり複雑な問題について、なるべく簡単にお話ししたいと思います。限られた時間ですから、まずお断りしますが、資料の例文を一々読みあげないことと敬語を一切省かせていただくということです。どうぞ、ご了承の程お願いします。お話しするテーマは一応、王朝時代の仮名文作品に於ける凝集性及びその一側面である時制とアスペクトの機能と役割ということになっているのですが、結論を先に言いますと、王朝散文を言語の面から考えた場合、その基盤を成すのは、時制でもアスペクトでもなく、法あるいはムードだということになるのです。そういう訳で、凝集性という概念及び若干の用語について少し述べてから、主に王朝時代の物語体の綴り方に見られる法の意味と働きについて話していきます。

資料1　プレ・テキスト



「テキスト」というものは閉鎖的な体系ではない。
プレテキスト(prior text)：
作者あるいは享受者が置かれている社会・文化の百科事典のような動的総合体。生活・文芸・言語など全ての文化産物の源。全知識の体験性を主張する概念である。

まず、凝集性ということばですが、これは文の集合体である談話又はテキストというものの必要条件です。凝集性のない文が並んでいても我々はそれを一つのテキストとして認めないのです。次にテキストですが、このことばは最近では文学作品だけではなく、歴史や社会的行動等についてもかなり広く使われるようになりました。しかしここでは物語一般というものに限って使います。そして資料1の図で示してあるように、テキストはプレ・テキストに囲まれており、それを基本的前提とするのです。ご存知のように、小説を読んだり、友人の体験談等を聞いたりする時、テキストにはことばとして表われていないのにその話についていくための知識としてプレ・テキストが絶対必要になっていることがよくあるのです。こういう陰の知識ともいうべきものがなければ冗談も皮肉も比喩さえも成り立ちません。まして引歌や本歌取りなど中古中世の日本文学で愛用された修辞技法においては言うまでもありません。私たちの日常のことばにも絶対欠かせないこの前提的知識は印刷技術をまだ知らない社会へ行くとなおさら大事なものになってきます。例えば、平安時代のような、手書きの写本技術しか持たない文化では、集団全体の共通基盤であるプレ・テキストの担う役割が自ら大きくなるのです。さらに平安中期の宮廷のような閉ざされた社会となると和歌にせよ、物語にせよ、本文の独創性等よりむしろ作者も享受する方もプレ・テキストの方に目を向けていたような気がしないでもありません。このような訳で、本文の隅々まで浸透しているプレ・テキストの重要性を認めてテキスト内の要素から成る凝集性が正確に記述できるようになるのです。

数年前の、スワヒリ語と古代英語の談話文析を扱った論文の中でポール・ホッパーは実に示唆に富むことを書いています。談話を進めて行く上で見られる時制又は相(アスペクト)の区別が存在するのはその話の内容に前景と背景を区別するためだと説いた後で、氏はこう言っています。「このような相(アスペクト)の区別は、既にできていたものがたまたま拾いあげられて談話に応用されたのではなく、むしろ談話を進めていく為のものとして発達したものだろう」という、まる

で文法が表現論の尻に敷かれたような発言をしています。しかしこういう風に見られるようになってきた文法あるいは統語範疇はテンスやアスペクトだけではなくて、文内の語順なども結局は修辞的な働きをしているのではないかと考えられるようになってきたのです。現に、文や文法のレベルでは分らなかった問題をもう一段上の次元一つまり談話のレベル一に持っていってみると案外簡単に解決できることがよくあるのです。そこで私は思うのですが、これは文学研究においても当然考慮されねばならないことではないでしょうか。それはどうしてかというと、ある文法範疇あるいは文型の選択の基準が、文法ではなく表現論の領域になるからです。文法範疇等が表現あるいは修辞の支配下にあって、コンテクストの表現的要求に応じて何らかの修辞的役割をも務めているとすると、文法体系もそこからの影響を受けざるを得ませんし、逆に文章の方から見ても、そこで狙われる効果等が文法的なものを利用することによっても生まれたりするので、立派な相互関係なのです。どちらを辿っても結局は相手のところに出るのです。

資料2　物語体（narrative, récit）の二態性

1　図（出来事）：筋を成す事柄。語られる対象で、話の内容である。

2　地（提示態）：諸事柄・状態等を包含する「語り」の母型。筋をなす出来事を紹介したり、評価したり、説明したりする態なので「提示態」と呼ぶことにする。

以上のような考え方を土台として、平安時代の文、文法、そして文章の相関関係を考えてみたいと思います。資料2の「物語体 narrative, récit」というところの「図」と「地」は様々な言語の物語体において認められているものですが、日本語、特に古典語の研究でもこの区別（「事柄態」と「提示態」の区別）にかなり似ている考えがあちらこちらの研究に見られるように思われます。文章あるいは談話の「図」と「地」の態の一つか、あるいはどちらもを指摘していると思われる学者の名前とその用語を挙げてみます。記憶と知覚心理学や人工知能等は図（figure）と地（ground）という用語が長い間使われていますが、これを簡単に説明すると、「地」を背景に「図」が浮き彫り

にされて知覚されるという関係になる訳です。そして、この「前景」と「背景」ということばもホッパー（Paul Hopper）とリード（Wallis Reid）の談話分析で「図」と「地」と同じ意味で使われています。アメリカの言語社会学の第一人者であるラボーヴ（William Labov）もウォレツキー（Joshua Waletzky）と組んで行なった体験談の調査（およそ600話を対象にしたもの）と分析で「events」（事柄）と「commentary」（解説・説明）という二つの態を指摘しています。日本の物語体の研究に目を移すと、柳田国男と玉上琢弥の「物語の自由なる区域」という概念が背景・解説である「地」に当たるものとして挙げられるのではないかと思います。そして松下大三郎の「提示態」や阪倉篤義の指摘する「提示的立場」は言うまでもなく「地」の方ですが、竹岡正夫の唱える「あなたなる場」と「物語中の現場」の「中心的事象」はそのまま物語体の「地」と「図」に相当するのではないでしょうか。もちろん、これら諸研究の観点や目的によってそれぞれ異なる所も少なくありませんが、ただ、これだけの人がしかもかなり違った分野、学問、そして言語に於てこれ程似た分析や着想を示しているということを見ますと、どうもただの偶然だとは思えません。これには何かの根拠があるはずです。

資料3　提示態の主な特徴

1　表現主体を起点とするダイクシス（直接指示）の表現
2　認識の法（表現主体の判断・信念・態度を表し、語られる事柄の認識的基盤をなす）
3　用言の否定形
4　接続
5　主張的表現：係り結びや終助詞、間投詞等
6　「但しづき」的表現：陳述を制限するもの
7　語られる事象の評価を表わす形容詞、「おもしろし」、「つきづきし」
8　比較の表現：～程（でない）、比喩、直喩、～のよう、引用の色々

資料3に提示態の形態論・統語論的特徴を並べてみました。実際には言語やジャンルによって多少の違いはありますが、同時に、かなり違った言語の

物語体でも驚く程似た方法でこの「事柄の態」（図）と「提示態」（地）を区別している例も少なくありません。例えば、時制と相（アスペクト）を文法範疇として扱っている言語（印欧語の殆んどが良い例でしょう）の物語体では、これらが例の「事柄」と「提示の態」の区別に利用される傾向があるようです。資料4に載せてある仏語・英語と現代日本語の例もこのような態の分け方を行なっているものです。いずれも語られる事柄自体とそれらを包含する、語り手の存在と意識を反映する陳述の態をはっきりと区別しているのです。

資料4　時制・相・法の切り換えによる物語体の「態」の区別

I　近代仏語の場合：単純過去（passé simple）対半過去（imparfait）：（略）

II　日本語（現代語）の場合：相（完了対未完了）と法（直説法対「確実」法）：

(い)　相（aspect）：悦子は各駅停車の宝塚行に乗って座席に掛けた。

窓外はとめどもない雨である。前に立ってゐる乗客がひろげてゐる夕刊新聞の印刷インクの匂いが彼女を物思ひからよびさました。　　三島由紀夫著「愛の渇き」より

(ろ)　法（mood）：直説法と「確実」法：（巨人軍の選手たちの間で交される長嶋茂雄のうわさについて。話は途中から）

こんな会話が、巨人のユニホームを着ている選手から聞こえてくる。

会話中の〝監督〟とは、いまの藤田監督ではない。〝長嶋監督〟なのである。

もちろん、いまのトロイカ首脳たちからは、ミスターのことは〝厳禁〟にされている。〝タブー〟な部分である。しかし、あえて選手たちは、長嶋を問題にするのだ。

「週刊ベースボール」9月5日、

（備考）　例（い）の相（完了の「た」と未完了の「る」）の切り換えが一種の遠近法で、語り出しと結びのところの「た」がその事柄を済んだこととして振り返って見ているのに対し、「る」叙述は事柄に接近して目の前にあるかのように回想して述べていると思われる。

（ろ）の例では、直説法と準体助詞「の」＋だ/であるから成る「確実」法とがパラグラフという段階で主題―陳述のような形を取り、パラグラフが変わると新しい情報を紹介し、又これについてコメントする。「のだ」の陳述で主題として掲げられたことを何らかの形で説明している。尚、「のだ」が他の用言の上に加わった指定的な陳述なので、用言だけからなる直説法とは発想の次元を異にするものである。

III　英語の場合：体験談に見られる過去形と現在形の切り換え：（略）

まとめ：Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの例に共通している点として、語られる出来事自体とそれらを包含する、語り手の意識を反映する陳述の区別が挙げられよう。知覚心理学のことばで言うとそれぞれ「図」(figure) と「地」(ground) に相当する。

資料５　竹取物語（「けり」の終止形のみ）

■■■■□□□□□□□□□□□□■□■□□□■□ (1)（第１章）

□□■□□□■■□□◙□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□、□□□□□□□■　（２、３）

■□□□□□□□□□□■■□□□■□□□□□□□□□□□□□□□■□□□□□□□■□□◙■■ (4)

■□□□□■◙□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■■□■ (5)

□□□◙□■□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■□□□□□◙□□□◙■■ (6)

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■■■■■□□■■ (7)

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■□□■□□□□□ (8)

□□□□□□□□□□□□□□□■□□■□□□□□□□□□□□□□■□□□□□□■□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□ (9)

□□□□□■□□□□□□■◙ (10)

※（会話の部分を除く）地の文の「けり」で終止する文の分布。

■：日本古典文学大系本

◙：その他の本

□：「けり」以外の助動詞で終止する文

(阪倉篤義氏の調査：日本古典文学大系「伊勢物語・竹取物語」15頁)

さて今、仏語・英語と現代日本語に見た、説明や評価を掲げる母型の提示態と、それに含まれながら時々抜け出ようとする事柄の態という区別は、平安時代の物語等では具体的に一体どういう形を取っているのでしょうか。まず資料５の図をご覧下さい。図の下の説明に書いたようにこれは阪倉篤義の研究で記述された助動詞ケリの『竹取物語』の各章段に於ける終止形の分布図です。ご覧の通り、各章の冒頭と末尾に集中しています。このようなことは『源氏物語』においてもいわゆる「草子地」という語る形式において指摘されています。終止形のケリを多く含む老女房達の語りもやはり段や場面そして巻の冒頭と結末の所に集中しているようです。周知の通り、ある時は話の内容のことを直接見聞きした作中人物の形を取り、又ある時は別な人物の目を通して語ることもあるし、そして時には同一文の中に何人かの表現主体が表われていることさえあります。しかし、私の狙いはこれら諸提示態の区別のルールを帰納することではなく、むしろその先決問題としてこれらに共

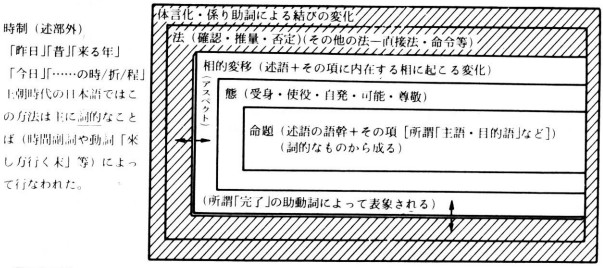
通する文法・文型的特徴を記述することにあります。そしてそれらの特徴を指摘しながら同時にそれぞれの文章上の機能と役割も併せて考えてゆきたいと思います。

資料6　文章構造に反映される述部の認識構造

冒頭（外 ―――→	―――→（内）―――→	結末外）
場面設定	筋の展開	結び
- 時制	- 相的区別が前に出る。	
- 法（特に確認の法―「き」と「けり」の終止形）	- 確認の法が従節に埋め込まれ、その数も減る。	- 再び文の終結に表われる。
- 係結び等に拠る主張的表現		
表現主体の影が濃い	薄くなる	又濃くなる

さて、ケリの終止形を多く含む提示態が物語の場面・段・巻の発端と末尾に多く現われているということを念頭において資料6の図をご覧下さい。この図は一応代表的な場面又は段の展開の形を抽象化して大ざっぱに書いてみたものですが、先程『竹取』と『源氏』について述べた特徴が如実に表われていると思います。図では、表現主体がはっきりと表われている文章から始まって、キ、ケリや推量の表現等の比較的多い文章、そこからそれらがあまりない文章に移って展開してゆき、やがて提示態の密度が再び高まってくることを示しています。ここで注意しなければならないのは、提示態が文章に埋め込まれていることと、その密度の高低にはある一定の傾向が見られるということです。そして面白いことに、この、外＝提示態、内＝表現主体の影が薄くなった事柄のみの世界という図式を資料7の図と比較してみると、文の述部の構造と相似形になっているではありませんか。述部の構造を助動詞の意味と接続順から考えてみると、推量の諸助動詞やキ・ケリ等、話し手の判断や態度を一番濃く表わしているものは他の助動詞の後に、一番最後―つまり外―につく。更にその上に係り助詞による特殊な結び方や動詞句を名詞化する連体法等が加わることもありますが、これらも話し手の判断と態度をはっきりと表わすものです。

資料７　述部構造に見られる認識の構造



事柄外：話し手の世界：その判断・態度など。

事柄内：叙述の対象となる事象自体の特徴。この事柄自体の諸層の外枠が相的変移を表象するもので、助動詞（あ）り（存在［静的］）、ぬ（実現）、つ（遂行）、とたり（結果）を扱っている。もちろん表現主体の判断によってつけられるものだが、内容はやはり事柄についてである。

ここで資料７の各段階の層について少し触れておきましょう。まず、真中の「命題」ですが、これは更に述語の項（主語・目的語等）と述語の語幹とに分けられる訳ですが、述部の内在的相（アスペクト）――つまり叙述の対象となる事象の時間的な表現形式――がこの項と述語の意味的関係から成るものなので、ここでは分けてありません。ここでいう相（アスペクト）とは、事象自体の時間的特徴で、それが状態か動作かそれとも過程なのかといった違いを表わす概念です。次に「態」の層ですが、これは文章のレベルで言う「提示態」等とは何の関係もないので念のため断っておきます。英語でいうと文章のレベルの態は mode、受身とか自発や可能等の態は voice といって分けられますが、発想の次元があまり違うので混同する恐れはないかと思います。で、再び資料７の図の態に戻りますと、これは図の通り、受身・使役・自発・可能そして敬語を表象する層です。これらは皆事柄自体についての情報として認識されたものと思われます。この点で敬語だけはちょっと問題になりそうですが、接続順からいうとかなり内の方の層にすえてあるので、当時の人にとっては二次的に付け加えるようなものではなかったことを示していると言えるでしょう。敬意を表わすために用言や体言そのものも変わるということを考え合わせると「事柄内」の位置付けがやはり正しく思われます。（もっと正確な言い方をすると、実世界の事柄の言語による表象の「内的」要素ということになります。）

更に外に出ていきますと、今度は「相」即ちアスペクト的変化の領域です。先程説明した、述部核心部に内在する相（アスペクト）に加えられる一時的な相的変移を表わす層とします。図の下の説明に書いたように、この層の助動詞がつくかど

うかは話し手の判断によることには違いないのですが、その助動詞によって伝えられる情報はその判断についてのものというよりは叙述される事柄についての情報と言えます。ですから、述語の語幹と項、そしてその態と相的変移を一応叙述される事柄自体（の言語的表象）の特徴として扱いました。

次に、「法」の層に抜け出ると助動詞の情報内容が表現主体の判断や態度等についてのものになり、提示態の様々な要因が表象されることになります。ここで特に注意したいのは「無標」の直接法ではなく、むしろ「有標」（marked、つまり普通でない場合）の認識を表わす法です。そこで、これよりこの認識の法——即ち語り手の判断・信念・態度等を述べる法——を焦点として、平安時代の物語の提示態の特徴を考えていくことにします。

資料８　認識（話し手の判断・信念・態度）を表わす法の連続体

↑客観性	けり	なり　めり		
		べし　らし	まし	
主観性	き　けむ　らむ　まじ		むじ	ず
	上接：連用形	終止（連体）形	未然形	
↓	既定の事実（確認）	非事実（推量）		反事実（打消）

資料８の図で、この認識を表わす法を、叙述される事象の確実度又は「事実性」によって分けてみました。もう少し詳しく説明しますと、一つの連続体を設けて両極にそれぞれ「事実」と「反事実」の観念を置いたのですが、左の極端から見ていくとまず叙述される事象が既に事実だと主張するケリとキがあって、そして既定事実と非事実の境目に跨るケムから推量の諸助動詞を通って、叙述の対象が事実に反するということを表わす打ち消しの助動詞ズへと続いていくのです。キ・ケリを一種の法と見るのには抵抗を感じる方もいらっしゃるだろうと思いますが、実は推量のような非事実の法に対して既定の事実とでもいうべき法を持つ言語も少なくないし、キ・ケリの文章上

の役割と昔から指摘されている色々の用法をよく見てもその最大公約数は結局確実性を表わすところにあるとしか思えません。しかし今日の話はムード論についてではないので、推量と打ち消しとの関係等に触れないでただキとケリの共通点と異る点を簡単に説明したいと思います。

キとケリの本義をごく簡単にいうと、先程も言いましたように、程度の差こそあれ、どちらも叙述される事柄の確実性を主張するという意味を持つのです。そして、これがどういった基準及び制約の中で使われるかを探ってゆくと、大体次のような原理が働いているように思います。先ずは、ある事柄を事実として陳述する場合、叙述される事柄の根拠性 (evidentiality) が話し手の判断では弱いと思われれば思われる程、キとケリの表わす確実性の認識的補強が要求される、という風に考えられます。逆に言うと、その事柄が事実だという根拠が確かであればある程、キとケリの認識的補強は要求されない、ということなのです。例えば、眼前に展開しつつある事の根拠性は自明のはずですから、それをその場で語るにはキやケリによる補強は不必要です。しかし、過ぎ去ってしまった事を語る場合となると、根拠性は自明どころか、写真や文章の記録などもないわけですから、そこは確実性をうったえるキとケリの出番となります。何かを事実らしく断定するのに確実性の補強が要ると認識された場合、いわば物理的、体験的に欠けている根拠性をことば（キかケリ）で以て補うという戦略です。和歌の詠まれた場面や事情を述べる詞書の例でいうと、より恣意的なところ——その場面に限られた風景や動作等の要素——をケリで断定するのが普通でしょう。

資料9　古今集のケリの例

一初瀬(はつせ)にまうづるごとに、宿(やど)り<u>ける</u>人の家に二ひさしく宿らで、程へてのちに三いたれり<u>ければ</u>、四かの家のあるじ、「かく五さだかになむやどりはある」と六言ひいだして侍り<u>ければ</u>、そこにたてり<u>ける</u>梅の花を折りて［よめる］

つらゆき

ひとはいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香ににほひ$\boxed{\text{ける}}$

資料９の歌の例でこの原理を見ると、例えば古今集の42番の題詞では「宿る」、「いたる」、「言い出す」と「立つ」は皆この歌の詠まれた時の事情を表わすのです。それぞれ一時的なもので、詠歌の一要素としては予測できないものです。題詞というものは、思えば普通は前から続いてくる脈絡もない所にいきなり新しい情報を差し出すようなものなので、内在する根拠性がゼロに近いということになります。ですから、こういう認識的条件を備えている題詞にはケリの客観的な確実性が役に立つのです。又、言い換えれば、題詞に描かれる場面を成す事柄にケリのつくのは、その事柄が詠歌という行為に於て必然性がない、即ち場面の一要素として予測可能性が殆んどないからです。ために、根拠性がないと話し手が判断し、ケリの確実性でこの欠如を補うのです。このように、ある歌が詠まれた事情を語る題詞では、その場面を成す事柄にケリが大体つくのですが、こういう題詞の多くを結ぶ「詠む」という事柄を陳述するのに「よみケル」という形を取る用例は殆んど見当たらないのです。これは一体なぜでしょうか。「詠む」にケリが直接つかないというのも、同じ原理によると私は思います。「宿る」や「立つ」等、その場面に限られた要素と違って、詠歌する場面に於ての「詠む」には必然性があるからです。いや、絶対欠かせないことです――詠むという行為が行なわなければ歌もないので、詠むことは「場面」の中心的出来事なのです。こういう訳で、題詞というシチュエーションには「詠む」ことがいわば備えついている特徴なのです。故に「詠む」ことの根拠性が自明の筈です。ちなみに、「よみ侍りケル」のような例が時々見られるのは、「よむ」ことはあらゆる場面に備えついているけれど、「侍り」等の敬語はその場面に限って参加している人物のことに拠るので、根拠性が弱いという訳です。

また、詞書を小さな物語として見ても、ケリの付く、付かないが同じ理屈

で説明できます。題詞は歌を紹介するためにあるので、本論の物語体の用語では「地」あるいは「提示態」に当たる訳です。このように考えれば、紹介される歌は即ち「図」ということになるのですが、次にくる歌を扱った述語——歌全体を陳述する動詞——は「詠む」に他なりません。そして物語体についても指摘したように、キ・ケリや他の法の助動詞が頻繁に出てくるのは、話の焦点（図）を支える「地」（提示態）の領域ですが、歌集に於てもこの原理が働いているようです。歌の詠まれた事情を提示する題詞の諸事象にケリがつくのに対して、歌を陳述する「詠む」という叙述には普通直接付かないのです。これは「詠んだ」ことが話の焦点であるからと思われます。『伊勢物語』や『大和物語』の文章にケリが『源氏物語』等よりずっと多いのも、話の「図」がまだ歌の方だからではないでしょうか。『伊勢』等の散文にもそれなりの面白さがあるとしても、大体に於ては歌の趣向を理解させるための「地」という本質からまだ脱出していなかった、ということが言えるかと思います。『伊勢』や『大和』でも、「よむ」にケリはやはりあまり付かないのです。そこで私は思うのですが、「源氏」の文章が「伊勢」等と一番基本的に異なるのは、散文の方にも「図」を創り出した、というところにあるのではないでしょうか。

阪倉篤義が『竹取物語』で指摘するように、終止形のケリは文章の移り目（例えば段の発端や末尾）のところに現れがちですが、『源氏物語』等を読んでみれば終止形は全体的にはどうも少ないという印象を受けます。むしろ連体形ケルと已然形ケレの方がずっと多いように感じられます。そこで調べてみたら、終止形は『竹取』と同様、やはり巻や談話の冒頭と末尾に集中しているようでしたが、同じ所にケルとケレの用例も見られるし、冒頭と結びの中間にはケルとケレの方が依然として多いようでした。小松光三と伊藤慎吾の調査を読んで更に調べたら、資料10の図と資料11の図に印（○と□）を付けた分布のことが分りました。

資料10は王朝時代の散文作品７つと『古今集』を対象にした調査の結果を

資料10　統合関係から見た「き」と「けり」の役割

古今集（歌）			かげろふ日記			土佐日記			枕草子			提中納言物語			平中物語			伊勢物語			竹取物語			上接語		
けれ	ける	けり	けれ	ける	けり	けれ	ける	けり	けれ	ける	けり	けれ	ける	けり	けれ	ける	けり	けれ	ける	けり	けれ	ける	けり			
1	0	0	13	14	9	2	2	0	1	16	0	2	5	1	14	18	13	10	19	51	0	3	3	動詞	アリ系の語	一
9	19	0	7	9	1	0	3	0	6	7	1	1	2	0	24	15	0	6	12	0	4	4	1	助動詞（補助動詞）	助動詞	
6	5	30	16	15	40	1	7	13	3	24	22	2	7	11	22	33	5	45	64	34	3	3	9	形容詞型以外		
2	5	5	11	13	8	0	1	4	2	15	8	1	3	0	16	6	5	13	13	9	2	1	4	形容詞型		
3	12	8	4	17	7	1	2	1	5	16	9	2	4	0	11	7	0	6	5	7	1	2	4	形容詞		二
0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	形容動詞		
4	30	15	13	54	34	3	19	4	34	75	9	14	27	5	87	107	36	54	107	70	14	26	10	動詞	アリ系の語以外	三
0	4	2	0	7	1	0	0	0	7	5	1	0	0	0	3	3	0	3	3	2	0	0	1	助動詞		

※　終止形の用例数が多い場合は ○ を付け、連体形又は己然形の用例数が終止形より多い場合は □ で囲んだ。
（小松光三氏の調査：「国語助動詞意味論」221～222頁）。

資料11 『源氏物語』のキ、ケリの用例

動　詞	キ	シ	シカ	ケリ	ケル	ケレ
有　り	7	150	21	50	165	80
言　ふ	0	42	5	4	14	3
おはす	0	32	1	9	50	7
思　ふ	0	55	15	11	29	11
おぼす	0	5	5	20	42	14
覚　ゆ	1	13	3	3	16	3
聞　く	0	45	5	4	0	0
聞　ゆ	1	25	1	7	4	7
来	0	48	1	0	2	1
侍　ふ	0	5	1	3	7	0
す	0	5	1	5	7	4
名告る	0	1	0	4	5	3
宣　ふ	0	32	9	4	5	3
侍　り	8	83	26	6	39	31
縫	0	1	1	0	3	4
見　ゆ	2	11	2	0	10	4
見　る	3	79	7	④	3	1
心地す	0	4	1	3	4	0

※　「キ」「ケリ」がともに接続する動詞の内で用例数の比較的多いものを対象とした調査（伊藤慎吾氏、「源氏物語の助動詞キ、ケリの用例（上）」）。

○：終止・連体・已然形の内、終止形の用例数が多いことを示す。

□：終止形の用例より連体形又は已然形の用例が多いことを示す。

表わすのですが、その下に書いたように、○のついた数字はケリの終止形の用例が多い場合を示し、□は終止形以外の方が多い場合を示します。ケリの終止形がよく付く完了の助動詞「ヌ」に関する数字は「ヌ」の意味的影響があまりに強いために除外したのですが、その他の数字は一見して分るように、これらの作品では、ケリの非終止形の用例の方が圧倒的に多い訳です。『源氏物語』全体を対象にした資料11を見てもこの傾向は強くなる一方です。

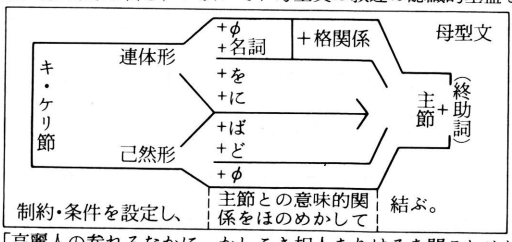
資料11の数字はキとケリが最も多く接続する動詞を対象にした伊藤氏の調べによるのですが、この図の通り、終止形の用例が多い場合はたったの一つしかないです。

この傾向を解釈するには色々な問題——例えばケルとケレの用例数のどれだけが係り結びによるかという問題——はあると思いますが、敢えて解釈してみれば、次のようなことが言えるのではないでしょうか。資料12をご覧下さい。

資料12

キ・ケリ応用の典型

従続節（修飾節を含む）に於いて、母型文の叙述の認識的基盤を成す。



←主節との接続については、順接にせよ、逆接にせよ、従位のキ・ケリの節がその基盤を成していることには変わりはない。

例：「高麗人の参れるなかに、かしこき相人ありけるを聞こしめして…いみじう忍びて、この皇子を鴻臚館（コウロクワン）に遣はしたり。」

「唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめなつかしうらうたげなりしを思し出づるに…よそふべき方ぞなき。」（源氏物語、「桐壺」）

ケルとケレという形の用例の方が多いというのは、結局資料12に抽象して書いた文型を取ったキとケリが（少なくとも『源氏』では）多いということになります。つまり、文の主動詞ではなく、何らかの形でその支配下にある

従属節にキとケリが多く付く訳です。図の下に源氏物語から引いた例を2つ挙げましたが、これで見られるように、ケルが名詞の修飾節にあっても、接続助詞「を」か「に」の前にあっても、その母型文の主動詞に対しては従属関係にあることに変わりはありません。そして已然形のケレにしても、その接続が順接でも逆接でも母型文の主動詞に対して従属関係にあるのです。キとケリの確実性が成す文章の認識的基盤は、要するに従属節に現れるのが普通のようです。主な、中心的な情報は主節に来るのですが、それを支える「地」の情報はその前にくる従属節を好むようです。話の「地」が文の従属節に移るようになったのも、伊勢物語等、歌を中心とする物語と趣向を異にすることを反映していると思います。

主にケリを中心に話してきましたが、これは物語体の認識的基盤を成すのに、キよりもケリの担う役割の方がずっと大きいからです。そして、第三人称で語る語り手の立場の性質上、自分の体験したことよりは間接にしか知らないことを多く語るので、自然ケリの客観性が要求されることになると思うのです。もちろん、キで間に合っているところも少なくありませんが、これは叙述される事柄の根拠性が何らかの理由でケリの付く場合より強いと判断されたからだと言えるかと思います。

今日の話の主なポイントを最後にもう一度繰り返しますと、まずは認識を述べる法という連続体が挙げられます。資料8で示したように、この連続体は客（主）観性と事実性という座標からなる図式です。第2のポイントは、この認識の法が物語体の「提示態」という背景的な場面要素の主な特徴の一つだ、ということです。提示態はある意味で語りの認識的基盤のようなものですが、この基盤を支えているかなめが確実性を表わすケリなのです。

文の述部内では認識を述べる法の助動詞は他の助動詞（態・相）の後に付くため、それらを支配する訳ですが、文章のレベルでも、この法が最も多く表われているのは場面（巻・段・談話等）の冒頭と末尾なので、その中間の叙述を包含（支配）するようなことになります。キとケリの終止形は特にこ

ういう所に出てくるようですが、例えば源氏物語を全体的に見ると終止形よりはキとケリの連体形と已然形の用例がずっと多いことに気がつきます。この傾向は更に詳しく調べてみる必要がありますが、一つの解釈として、シ・シカとケル・ケレの多くの例が従属節にあると考え、「既定事実（キ・ケリ）の法」即ち物語体の認識的基盤の一番しっかりしたものは文の主節より従節に置かれる傾向がある、ということが言えます。この傾向は、言い換えれば、成熟した物語文章では、各場面の新情報や要点を支える既定的基盤（キ・ケリで主張される情報）は主節ではなく、従節にくる、ということになります。

以上は王朝散文の物語体の凝集性について、テキスト内に見られるいくつかの要素を取り挙げてお話ししました。ご静聴をありがとうございました。

参 考 文 献

（アルファベット順）

Chafe, Wallace."Discourse Structure and Human Knowledge", in Carrol and Freedle, eds. *Language Comprehensin and the Acquisition of Knowledge*. Washigton, D. C.: V. H. Winston and Sons, 1912.

Hopper, Paul."Aspect and Foregrounding in Discourse", in Talmy Givon, ed. *Discourse and Syntax*. New York: Academic Press, 1979.

伊藤慎吾　「源氏物語の助動詞キ、ケリの用例（上）」（武庫川女子大学紀要 XVI）

小松光三　「国語助動詞意味論」（笠間書院、昭55）

Labov, William, and Joshua Waletsky,"Narrative Analysis: Oral Versions of Personal Experience", *Essays on the Verbal and Visual Arts: Proceedings of the 1966 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society*. Seattle: University of Washington Press, 1967.

Reid, Wallis."The Quantitative Validation of a Grammatical Hypothesis: the *passé simple* and the *imparfait*", *Papers of the Northeastern Linguistic Society* 7.

阪倉篤義　「竹取物語・解説」（日本古典文学大系・第９巻、岩波書店、昭３２）

阪倉篤義　「歌物語の文章――「なむ」の係り結びをめぐって――」(「論集日本語研究・中古語」、有精堂、昭54)

竹岡正夫　『助動詞「ケリ」の本義と機能』(「論集日本語研究7・助動詞」、有精堂、昭54)

玉上琢弥　「物語音読論序説」(「源氏物語研究」、角川書店、昭41)

Tannen, Deborah."What's in a frame ? Surface Evidence for Underlying Expectations", in Freedle, ed. *New Directions in Discours* Processing, vol. 2. Norwood, N. J.: Ablex, 1979.

Wolfson, Nessa."The Conversational Historical Present Alternation", *Language* LV no. 1 (1979).

柳田国男　「竹取翁」(「昔話と文学」所収)

(配布資料のうち印刷の都合上直接言及のあったもののみとし、他の用例は省略した)

討議要旨

古田島洋介氏から、どれか一つ具体的な本文に沿って分析の仕方の例を示してほしい旨の発言があり、発表者から、「き」と「けり」を例として、これらはいずれも、確実性を表す助動詞ということであるが、眼前の事実であれば「き」も「けり」も必要はない。事実として不確実だが、過去の体験によって、あるいは文化的伝統によって一般に事実だと信じられている時に、事実であることを認識的「法」によって補強するために「き」や「けり」が使われる。例えば古今集の中に例が多いが、一つ小野小町の歌でいえば、

色みえで移ろうものは世の中の
　人の心の花にぞありける

のように視覚の事実以上に真実だというとき「けり」という強い確実性の「法」

が要求される。一般に確かである直接の根拠がなくなる程「けり」が多く使われる。

また時制についていえば、「いずれの御時にか」とか「いまはむかし」と冒頭にあるとその後はすべてその時制のもとに解釈され凝集性の一番外側の枠組みをつくっている、と説明があった。